



「長く残る鐘だからこそ自分の想いをどこかに残したい」

伝統工芸士
富山県卓越技能院会員

西川 實

profile

[にしかわ・みのる]

1950(昭和25)年富山県高岡市生まれ。法政大学経済学部中退後、1972年4月「株式会社老子製作所」に入社し、梵鐘の製作に携わる。1986年、製造課長に就任。1994年、製造部長に就任。1997年、通産省より高岡銅器造型部門の伝統工芸士としての認定を受ける。2005年6月、同社常務取締役に就任。富山県卓越技能院会員。

「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり」とは『平家物語』の冒頭だ。「ゴーン」という寺の釣鐘(梵鐘)の音は、日本人の心に余韻を残し、魂にまで届いていく。鐘の音は「积淀牟尼の声である」ともいわれる。

我が国有数の銅器の産地、富山県高岡市に、日本の梵鐘の約7割、年間100口を生産する老子製作所がある。江戸時代中期に創業された同社は、広島の平和の鐘、国連の鐘、西本願寺梵鐘など、数多の名鐘を手がけてきた。

この老子製作所の梵鐘づくりを指揮するのが、西川實さんだ。この仕事に就いて34年、今まで手がけた鐘は数千口にものぼる。

梵鐘づくりは音づくり

「やすらげる音。ほどほどのゆったりしたうなりで、音の余韻の長い鐘

音のプロフェッショナル

(16)

撮影／杉浦康之
取材・文／松原弘子

を…」。西川さんがとにかくこだわるのは、その音である。梵鐘は約三ヶ月をかけて手づくりされるが、各工程での細かな作業の一つひとつが鐘の音に影響を与えるのだという。

まずは、梵鐘の原寸大の図面を書く。このとき設計される形と肉厚が、鐘の音色を決める大事な要素となる。肉が厚いと音程は高くなり、薄いと低くなる。しかし、全体の厚みが同じでは遠くまで響かないで、バランスを見ながら部分によってその厚さを変える。

そして、梵鐘の型づくり。鐘の表面になる外側の鋳型と、内側の空洞部分の型(中子)をつくる。この隙間に溶かした金属を流すと、梵鐘ができるというわけだ。型の材料となるのは、砂・水・粘土を混ぜた真土である。西川さんは、粘度が違う何種類もの真土を使い分ける。「手の平のしわの中の残り具合で粘度をみると、砂の状態が絶えず変わるので、目で手で確かめながら…」。長年の経験に裏付けられた職人の勘と技がものをいう。

この型は、流し込む金属の高温に耐え得るべく、頑丈なものでなければならぬ。たとえば外側の鋳型。

模様と文字を入れて形づくったあと、いったん火にかけて、割れる部分は削られてしまう。それを直してはまた焼く。何度もこれを繰り返して、強い鋳型にしていく。型づくりは、実に根気の要る作業だ。

余韻を鋳込む、慈愛を鋳込む

「鋳込み」は、梵鐘づくりのクライマックスともいえる作業だ。銅と錫の合金、すなわち青銅を1,200℃に溶解して用いる。材料の配合の割合はもちろんだが、「良い音を出すための金属組織をどうつくるかが大事」なのだという。

「同じ材料でも結晶の仕方が違う。あまりきれいな組織ではなく、多少荒い部分があるほうがより振動して、音の余韻が長くなるんです」

去る6月29日、梵鐘の「火入れ式」に、大阪府八尾市の聞法寺のご住職と三十

名の檀家の方々が臨席した。第二次大戦時に多くの寺の鐘が供出され鋳潰されてしまったが、聞法寺の鐘も



いたん鋳型を焼き、割れたところを修復する。これを繰返して強度をつけていく。



バランスを見ながら、慎重に鋳型を中子(なかご)にかぶせる。



大阪府八尾市の開法寺のご住職と信徒さんが参加しての梵鐘の「火入れ式」。



願いを書いた銅塔婆を青銅の溶湯に入れ、熱い青銅が飛び散らないよう、また保温のために溶湯を葦灰で覆っている。

そのひとつであった。

「やっと私たちの鐘ができるんです。この日に立ち会えるのは何よりうれしい」

組まれた鋳型を前に全員で経を読み、鐘に想いを込める。そして、溶解炉から取鍋に移された溶湯のなかに、「銅塔婆」をそっと入れる。それぞれの願いが記されたこの薄い銅版も、梵鐘に鋳込まれるのだ。

信徒の皆さんを見守る中、溶かした青銅を鋳型に流し込む。その温度は1,100℃弱。緊張感を伴う作業だ。この鋳込みを終えて二晩ほど冷やす。型をばらして磨きをかけ、塗装をして仕上げる。

梵鐘が良い音を響かせるには、撞く道具も大事だ。西川さんは、鐘の大きさによって撞き木の太さと長さを決める。撞き木には、赤松の芯去り材を使うことが多いという。「私たちのつくった鐘を、手を合わせて拌んでくれる。ずっと長きにわたって使ってもらえて、しかも使う方の顔が見える。ありがたい仕事です」

造形の美しさと癒される音

西川さんの印象に残る鐘のひとつに、神奈川県鎌倉の名刹、安國論寺の梵鐘がある。「最高の梵鐘を」という依頼に、芸術院会員にして人間国宝の故香取正彦氏が設計し、西川さんが製作を手がけた。1987(昭和62)年のことである。この梵鐘の音をはじめて聞いた時、ご住職の玉川

覺祥さんは「奥深い、品のよい“典雅な”音だ…」と感じ入ったという。

安國論寺の鐘楼は裏山の尾根にある。急な坂道を登りきって梵鐘に対峙する。洗練された美しい姿。本格的な「ふかし青銅」の肌には、日蓮聖人の真筆を写した「南無妙法蓮華經」と「立正安國」の文字が刻まれている。鐘が撞かれるのは、日に二度。心に染み入るような厳かな鐘の音が、緑濃い松葉ヶ谷一帯に響きわたっていく。

「信仰心が強ければ強いほど、愛着や思い入れが深いほど、良い音が鳴る」と西川さんが言う。

過去から未来へ、铸物師の技と心を伝える

西川さんは、古い梵鐘の鑑定を依頼されることも多い。

「鐘の内側を見ると、铸物師の苦労がわかるんですよ。ここを失敗して、こうやって削って直したなど…」

現代のような設備のない時代に、鐘を実際にどうつくったのか。俄然、話に熱が入る。「山の中腹にある奈良の東大寺の大鐘は、あの場所でつくっているんですよ。絶対に、動かせない。だから、あそこの上のほうに『こしき』と呼ばれる炉があったはずなんです」。そして、当時そのままのやり方で鐘をつくってみたいのだという。

今から三年前、西川さんは夢の一つを叶えた。日本一大きい梵鐘を完成させたのである。それを二口も。その直径たるやなんと3m28cm! 工場の溶解炉やクレーンの能力を超えるとてつもない巨鐘を「“昔の技術”と“今の技術”的いいところを積み上げて、誰も思いつかない方法で」つくりあげたのだ。

「後に続く人のためにこの記録を残してあげたい。それを踏み台に、また改良を加えてくれれば…」

「百年前の先輩がつくった伝統とは守るだけのものではない。私たちが今やっていることが、また伝統になっていくはず。百年後のために、我々の工芸のやり方と鐘への想いも伝えたいんです」

●
「明治生まれの頑固一徹の親父も、



祖父も、その先祖も铸物屋。私の二人の息子がこの仕事を継いでくれなかったのが、内心、残念で仕方ないんです。まだ一歳の孫に期待するかな(笑)

「大晦日にNHKテレビの『行く年来る年』を観ていると、たいがい自分のつくった鐘が出てくる。職人冥利に尽きます。でも、きっちり音が伝わるかなあと気になって…(笑)」

温かい人柄と職人としての誇り、そして梵鐘づくりにかける熱い気持ちが、良い鐘の音をつくりだすのだ。きょうも日本の各地で、当代随一の铸物師、西川さんの想いを込めた鐘の音が響きわたる。耳を、心を傾けてじっくりと聴いてみようと思う。

安國論寺の「平和の鐘」。日蓮聖人の真筆を写した「立正安國」の文字が刻まれている。(撮影・鈴木義志)



【読者プレゼント】

梵鐘をかたどった「貯金箱」と「風鈴」を抽選でそれぞれ3名様にプレゼントします。23ページの応募要領をご覧のうえ、ご希望の品名を明記してご応募ください。